

―失われた都市の記憶を求めて―

美術都市



発見

第一回

菅谷富夫

大阪市立近代美術館建設準備室学芸員

# 前衛写真家たちのモダン都市

大阪が「大大阪」と呼ばれ、御堂筋が開通し地下鉄工事が進められていた昭和七年（一九三二）、モダン大阪の生み出した都市芸術とも呼べる写真芸術は一つのピークをむかえていた。

既に前衛的な作風で知られていた浪華写真倶楽部の小石清が代表作となる「初夏神経」を発表し、丹平写真倶楽部は第二回丹平展を開催しその前衛写真ぶりが、東京の写真ジャーナリズムをはじめ全国の写真関係者の注目を集めていた。



心齋橋筋2丁目にあった丹平ハウスは、大阪のモダニズムの牙城のひとつだった。「今治水」で知られた丹平製薬創始者の森平兵衛が、大正13年に建てた複合商業ビルで、薬局以外に飲食ができるソーダファンテンや美容室もあり、写真用品も扱った。赤松麟作の洋画研究所のほか、丹平写真倶楽部もここを拠点とした。



丹平写真倶楽部の会合の様子、立ち上がっているのが安井仲治。写真提供：兵庫県立美術館

昭和の初め、浪華、丹平といった有力写真倶楽部の例会の際、会場の前には当時でもそう多くはない自家用車が何台も並び、会員は撮影会と称して、貸家一軒分といわれた高価な最新カメラ「ライカ」を首から提げて郊外へと出かけていったという。

この時代、大阪写真界の中心は何と云ってもそのような写真倶楽部であった。浪華写真倶楽部は明治三七年（一九〇四）に創立された日本最古の現存する写真倶楽部であり、かたや丹平写真倶楽部は昭和五年（一九三〇）に創設されたばかりであったが、どちらも大阪を代表する写真倶楽部であり、第二次大戦で活動が休止を余儀なくされるまで「新興写真」と呼ばれた新しい写真のスタイルを開拓する旗手となっていた。

これらの写真倶楽部の特徴は、その会員たちがアマチュア中心であったということである。今でこそ「アマチュアはプロの下」と思われがちであるが、彼等はむしろ長所を存分に發揮した。「アマチュアは自由」なのである。尊敬に基づいた師弟関係はあっても封建的なそれはなかったし、裕福な商店主であったり大企業のエリート社員であった彼等には、後の商業写真家たちのようにクライアントの意向に左右される不自由さもなかった。その自由さと大阪人の進取の気性が一体化した時、このアマチュア写真家たちが従来の絵



写真提供：兵庫県立美術館

安井仲治 [旗]  
1931年

昭和6年(1931)のメーデーを写したものの。手ぶれやボケがデモ隊の躍動感を表すとともに、モダン都市大阪の活力を示している。後は中之島公会堂と思われる。

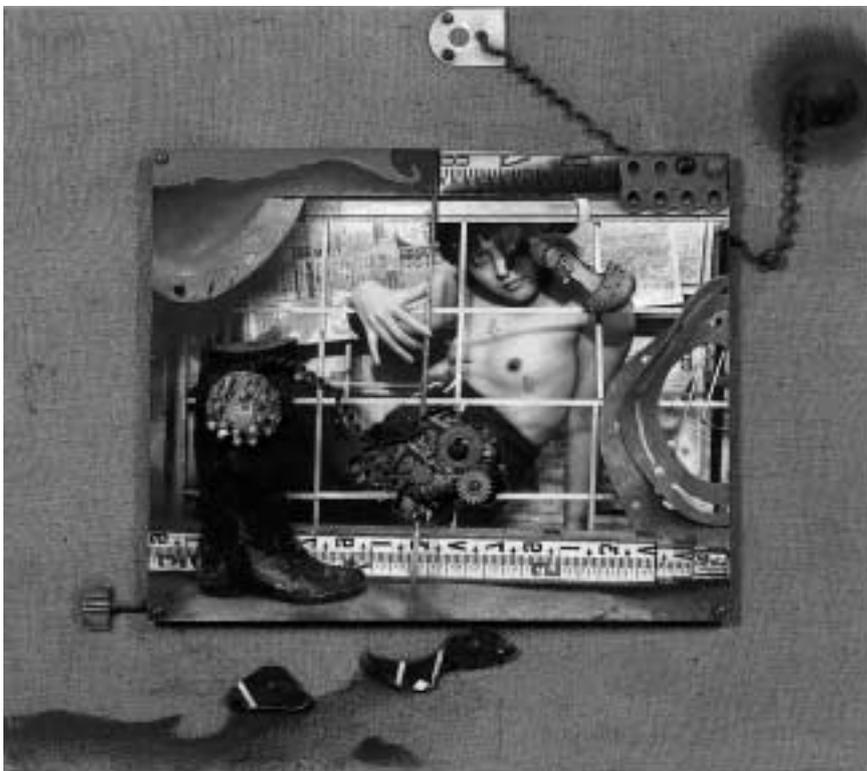


安井仲治  
[クレインノヒビキ]  
1923年

安井仲治の初期の作品。何度も焼き付けと水洗いを繰り返すゴム印画と呼ばれる技法で制作されている。何度も重ねることが作品のイメージに奥行きと深みをもたらしている。

個人蔵(兵庫県立美術館 寄託)

画的芸術写真ではなく、ヨーロッパからもたらされた前衛的な写真を取り入れ、日本の写真界をリードしていったのであった。



大阪市立近代美術館建設準備室 蔵

花和銀吾 [複雑なる想像]  
1938年

住友本社の幹部候補として入社した花和は、のちに大阪府立商品陳列所の所長を務める。女性を写した写真に廃物をコラージュした前衛的な作品である。

小石清  
[泥酔夢・疲労感]  
1936年

小石はカメラや写真材料に精通し、多様な技法を試みた浪華写真倶楽部を代表する前衛的写真家のひとり。この作品もイメージを重ねることで幻想的な作品となっている。



東京都写真美術館 蔵

上田備山 [漁]  
1930年代

安井仲治と共に活動の中心を浪華写真倶楽部から丹平写真倶楽部へ移し、指導者としても活躍した。この作品は存在が確認されている上田の唯一の作品でもある。



大阪市立近代美術館建設準備室 蔵

安井仲治  
[窓] 流氓ユダヤ  
1941年

通称杉原ビザをもってナチス・ドイツの迫害から逃げてきたユダヤ人たちを神戸で撮影。安井、川崎亀太郎、河野徹、椎原治、田淵銀芳、手塚繁が撮影に参加した。



個人蔵(兵庫県立美術館 寄託)

椎原治  
[ALLEMANDE]  
1937年頃

球体とレンズの組み合わせによって光と影の効果を巧みに使った作品で、当時、日本に紹介されたばかりのドイツの写真作品を彷彿とさせるものである。



椎原保 蔵(兵庫県立美術館 寄託)